

潜在的な自己評価と内集団評価の相互関係の検討

渡辺 匠 (wata@l.u-tokyo.ac.jp)

唐沢 かおり

[東京大学]

The relationship between implicit self-evaluation and ingroup evaluation

Takumi Watanabe, Kaori Karasawa

Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo, Japan

Abstract

The current report examined the relationship between implicit self-evaluation and ingroup evaluation. Although previous research has indicated that explicit self-evaluation predicts ingroup evaluation on each trait dimension, there has been much less emphasis on how implicit self-evaluation and ingroup evaluation are mutually interrelated. On the basis of the theories which emphasize the role of the individual self in ingroup evaluation (e.g., Cadinu & Rothbart, 1996), we predicted that implicit evaluation of the self would become a better predictor for implicit ingroup evaluation. Forty undergraduates participated in the study. We used the typical minimal group procedure (Tajfel et al., 1971), and all participants were randomly assigned to artificial laboratory groups. Implicit self-evaluation and ingroup evaluation were measured with Implicit Association Test (IAT; Greenwald et al., 1998). The analyses revealed that the self and ingroup were more associated with positive traits than negative traits, indicating that the self and ingroup were both positively biased. These results are in line with the findings of previous literature, but there was no significant correlation between overall implicit self-evaluation and ingroup evaluation. Thus, the overall pattern of results in the present study was inconsistent with our prediction, but, nonetheless, implicit self-evaluation significantly predicted implicit ingroup evaluation on some Big Five trait dimensions. Namely, implicit self-evaluation was positively correlated with implicit ingroup evaluation on extroversion and openness dimensions. In contrast, they were not significantly correlated with each other on neuroticism, conscientiousness, and agreeableness dimensions. The discussion argued that these differences may be partly due to the significance of participant's evaluation of each trait dimension.

Key words

self-evaluation, ingroup evaluation, Implicit Association Test (IAT), Big Five, minimal group

1. 目的

人は自分以外の他者を、集団成員性の情報に基づいて判断する傾向がある。すなわち、他者は自分が所属する内集団と、自分が所属しない外集団の2つに分類され、内集団の成員は外集団の成員よりも好意的に評価されることが繰り返し確認されている (Brewer, 1979)。特に、最小条件集団パラダイム (Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971) を用いた実験では、集団間内に相互作用が存在しない状況においても、人は外集団よりも内集団に対して好意的に振る舞うことが示されている。このような内集団ひいき現象に関して、社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) や自己カテゴリー化理論 (Turner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherell, 1987) は、人は自尊心維持・高揚の欲求を持っており、集団間比較などの要因により社会的カテゴリーが顕著になると、内集団の価値を高めることで自尊心を維持すると仮定している。

近年、このような従来の説明に対して、内集団への肯定的評価は自己評価の影響によって説明できるという理論が、複数の研究者によって指摘されている (Cadinu &

Rothbart, 1996; Clement & Krueger, 2002; Gramzow, Gaertner, & Sedikides, 2001)。例えば、Cadinu & Rothbart (1996) のセルフ・アンカリング説によると、自己評価は一般的に高い傾向があり (Alicke, Klotz, Breitenbecher, Yurak, & Vredenburg, 1995; Koole, Dijksterhuis, & Van Knippenberg, 2001)、その高い自己評価が内集団の評価に反映されることで、内集団に対する評価が肯定的になると仮定されている。Otten らによると、自己概念と内集団の概念は重複しており、自分が持つ特徴は内集団成員も持っていると推測し、また、内集団成員が持つ特徴は自分も持っている判断する傾向がある (Otten & Epstude, 2006)。このような知見を踏まえると、一般的な自己評価が高いこと自体が、内集団に対する高評価をもたらしていると解釈することができる。

本研究では、上記の自己評価の役割を重視した理論に基づき、自己評価と内集団評価の対応関係を検討することを目的とする。具体的には、反応時間パラダイムを用いて、潜在的に自己評価が高い性格次元は内集団評価も高くなるかどうか、および、潜在的に自己評価が低い性格次元は内集団評価も低くなるかどうかに関して分析を行う。過去の顕在指標を用いた研究では、自己評価は性格次元別に内集団の評価に反映されることが示唆されているが (e.g., Otten & Wentura, 2001)、本研究では、自己と

内集団の概念連合が性格次元別にみられるかどうかを解析することで、自己評価が内集団評価に反映されるという説明の妥当性を潜在的側面から検証する。また、このような潜在指標を用いることは、自己評価や内集団評価の測定における参加者の意図的な反応統制や評価懸念を防ぐという点からも意義があると考えられる。

本研究では、潜在的な評価の測定法として、Implicit Association Test (IAT; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) を使用する。IAT は、単語認知研究の流れを受け、社会心理学において開発された反応時間パラダイムであり、意味(概念)記憶に基づいたネットワーク構造を前提としている(e.g., Collins & Loftus, 1975)。具体的には、意味概念が1つの単位としてネットワーク上に構造化されており、関連性の高い概念ほどより近接し、概念間の結びつき(リンク)も強くなると仮定されている。さらに、特定の概念が活性化すると、その概念と関連性の高い概念にも活性化が伝播するために、概念間の連合強度が高いほど、カテゴリーの分類が簡単かつ容易になると考えられる。IAT では、通常、対象概念と評価次元という2つの概念を組み合わせて各刺激のカテゴリー判断を行うことにより、対象概念と評価次元の概念間の連合強度を反応時間から推定する。このようにして、1組の対象概念に対する参加者の潜在的態度を測定することが可能になる。

過去の研究では、IAT は他の潜在的な態度測定法との相関が低いことや(Bosson, Swann, & Pennebaker, 2000)、どのような認知過程を反映しているのかが必ずしも明確でないことなどの問題点が指摘されている。しかし、IAT はステレオタイプなど、態度表明が社会的に問題のある場合に顕在指標よりも予測的妥当性が高くなることや(Greenwald, Poehlman, Uhlmann, & Banaji, 2009)、IAT によって測定された偏見の強さは脳の神経活動パターンと相関していることが報告されている(Phelps, O'Connor, Cunningham, Funayama, Gatenby, Gore, & Banaji, 2000)。さらに、IAT は他の潜在的測定法と比較して内的一貫性が高いことが示されており(Bosson et al., 2000)、これらの研究知見との整合性からも、IAT における反応時間指標は、概念間の連合強度を表しているという可能性が示唆される。

具体的な IAT の手続きとして、まず、コンピュータ画面上に対象概念、もしくは、評価次元を表す刺激が1つずつ呈示される。参加者はその刺激が左右どちらのカテゴリーに当てはまるかを判断する。回答はキーボードの2つのキーのいずれかを押すことによって行われ、それぞれのキーには対象概念と評価次元の2つのカテゴリーが割り当てられている。同じキーに割り当てられた対象概念と評価次元の連合が強いほど、カテゴリー分けが容易になるために反応時間は短くなる。一方、同じキーに割り当てられた対象概念と評価次元の連合が弱いほど、カテゴリー分けが困難になるために反応時間は長くなる。課題後、2種類の弁別課題の平均反応時間を算出し、その差得点が概念間の連合強度の指標となる。

IAT を用いて自己評価と内集団評価を測定した場合に、

以下の3つの仮説が導出される。まず、一般的に自己は肯定的に認知されているために(Alicke et al., 1995; Koole et al., 2001)、潜在的な自己評価は高いと予測される。同様に、自己評価は内集団評価に反映されるために(Cadinu & Rothbart, 1996; Clement & Krueger, 2002; Gramzow et al., 2001)、潜在的な内集団評価は高いと予測される。また、自己概念と内集団概念は相互に関連しているために(Otten & Epstude, 2006)、潜在的な自己評価と内集団評価の性格次元別の相関は高いと予測される。なお、本研究では、他者の性格判断の次元として、Big Five を使用する。パーソナリティに関する研究では、性格の基本特性は5次元に収斂することが報告されている。5次元とは、外向性、情緒不安定性、開放性、誠実性、調和性の5つを指し、これらの Big Five モデルは信頼性・妥当性がともに高いことが示されている(和田, 1996; McCrae & Costa, 1987)。

ところで、本研究では、以上のように潜在的な自己評価と内集団評価の相互関係の検証を主たる目的とするが、Spielman (2000) によると、最小集団状況における内集団ひいきは、集団構成の影響を受けることが示唆されている。すなわち、内集団と外集団が1つずつの場合は競争概念が活性化しやすいが、外集団が2つに増えると競争概念が活性化しにくく、相対的に内集団ひいきが生じにくいことが指摘されている。本研究ではこのような Spielman (2000) の主張を踏まえ、外集団が1つの2集団条件と外集団が2つの3集団条件を用いて、集団構成が内集団評価に与える影響についても併せて検討を行う。実験仮説として、セルフ・アンカリング説など、自己評価が内集団評価に反映されるという理論からは(Cadinu & Rothbart, 1996; Clement & Krueger, 2002; Gramzow et al., 2001)、内集団評価は外集団数に関わらず高いと予測される。それに対して、Spielman (2000) の主張に基づくと、2集団条件は3集団条件よりも内集団評価が高くなると予測される。

2. 方法

2.1 参加者

大学生40名(男性11名、女性29名)が個別に実験に参加した。各参加者は、2集団条件、もしくは、3集団条件にランダムに割り当てられた。

2.2 実験手続き

実験はコンピュータを用いて行われた。課題は、自己評価の測定、最小条件集団パラダイムによる集団分類、内集団評価の測定、の順序で行われた。全ての課題の終了後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

2.3 自己評価の測定

潜在的な自己評価を IAT により測定した。IAT は5つのブロックから構成されており、対象概念には「自分—自分でない」、評価次元には「ポジティブ—ネガティブ」の各カテゴリーを使用した。ブロック①は「自分—自分でない」の対象概念を弁別する練習試行、ブロック②は「ポ

「ジティブーネガティブ」の評価次元を弁別する練習試行、ブロック③はブロック①の対象概念とブロック②の評価次元を組み合わせ、両者を交互に弁別する本試行であった。ブロック④はブロック①の「自分—自分でない」の対象概念について左右を逆転して弁別する練習試行、ブロック⑤はブロック④の対象概念とブロック②の評価次元を組み合わせ、両者を交互に弁別する本試行であった。練習試行のブロックは各 20 試行、本試行のブロックは各 80 試行から構成されていた。「自分またはポジティブ」と「自分でないまたはネガティブ」の組み合わせのブロックは一致ブロック、「自分でないまたはポジティブ」と「自分またはネガティブ」の組み合わせのブロックは不一致ブロックと定義される。半数の 20 名の参加者は一致ブロックを先に行い、他の 20 名の参加者は不一致ブロックを先に行うことで、ブロック順序に関してカウンターバランスを行った。

自己評価 IAT の刺激項目として、以下の単語を使用した。「自分」の対象概念を表す刺激は、私は、私の、私に、私を、私のもの、の 5 語であり、「自分でない」の対象概念を表す刺激は、彼らは、彼らの、彼らに、彼らを、彼らのもの、の 5 語であった。評価次元を表す刺激は、和田 (1996) を参考に Big Five の各次元から 4 語ずつ、計 20 種類の単語を使用した。具体的には、「ポジティブ」の評価次元を表す刺激は、陽気な、積極的な (外向性)、楽観的な、落ち着きがある (情緒不安定性)、独創的な、臨機応変な (開放性)、勤勉な、計画性のある (誠実性)、親切な、協力的な (調和性)、の 10 語であり、「ネガティブ」の評価次元を表す刺激は、暗い、無愛想な (外向性)、悲観的な、神経質な (情緒不安定性)、想像力が乏しい、興味の狭い (開放性)、怠惰な、軽率な (誠実性)、短気な、怒りっぽい (調和性)、の 10 語であった。

参加者がプログラムを開始すると、IAT の課題に関する教示がコンピュータ画面上に表示された。具体的には、「課題が始まると、画面中央に単語が一つずつ表示されます。各単語がどのカテゴリーに属するかを判断してください。カテゴリーの名前は、画面の左上と右上に常に表示されます。左上のカテゴリーに属するときは、「F」のキーを左手の人差し指で押してください。右上のカテゴリーに属するときは、「J」のキーを右手の人差し指で押してください。課題が変わるとカテゴリーの名前も変わりますので、カテゴリーの名前に注意しておいてください。表示された単語をカテゴリー分けするとき、できるだけ正確に判断し、できるだけ素早くキーを押してください。」であった。試行開始後、呈示された単語に対して正しいカテゴリーの反応キーが押されると単語は消え、250 ms 後に次の単語が呈示された。誤反応の場合は、刺激の下に赤い「×」印が呈示され、反応キーが異なることをフィードバックした。誤反応後に、改めて正しい反応キーを押すと「×」印は消え、次の単語が呈示された。単語刺激が画面に表示されてから、正答の反応キーが押されるまでの時間を、反応時間として ms 単位で記録した。

2.4 集団分類

自己評価 IAT の後、集団分類の手続きとして、最小条件集団パラダイム (Tajfel et al., 1971) を使用した。参加者はコンピュータの画面上に表示される抽象画がどの程度好きかを 7 段階で評価し、この課題を 20 試行を行った。実験に使用した抽象画は 2 人の画家 (3 集団条件では 3 人) によって描かれたものであると告げ、課題の終了後、参加者は特定の画家によって描かれた絵を他の画家による絵よりも好ましいと評定していると教示した。実際は、絵の判断課題の結果に関わらず、参加者は各集団にランダムに分類された。

集団分類後、実験者は参加者に各集団のメンバー名が書かれたグループリストを手渡した。グループリストのメンバー名には各集団で「山」や「川」等の共通の漢字が 1 文字含まれており、参加者が内外集団のメンバー名を認識しやすくなるように配慮した。なお、共通の漢字は、参加者の名前に含まれる文字と重複しないようにした。参加者が各集団メンバーを識別できるようにするため、グループリストに書かれた各集団のメンバー名を確認する時間を約 1 分間設けた。参加者から質問があった場合は内容に関して補足説明を行った上で、内集団評価の IAT を開始した。

2.5 内集団評価の測定

潜在的な内集団評価を IAT により測定した。IAT の課題構成は自己評価 IAT と同じ構成であり、対象概念には「同じグループ—違うグループ」を使用した。対象概念の刺激項目には、集団分類手続きで使用したグループリストの名前を使用した。グループリストの名前は参加者によって異なり、例えば、「同じグループ」の対象概念を表す刺激として、川口、川波、小川、乙川、中川、の 5 語を使用し、「違うグループ」の対象概念を表す刺激として、山崎、山本、山我、高山、遠山の 5 語を使用した。「ポジティブーネガティブ」の評価次元を表す刺激は、自己評価 IAT で用いた単語と同一のものを使用した。課題後、参加者の所属集団名を確認し、ディブリーフィングを行った上で実験を終了した。

3. 結果

3.1 操作チェック

まず、最小条件集団の操作に関して、参加者全員が正しい所属集団の名前を回答しており、実験教示が正しく理解されていたことが確認された。さらに、自己評価と内集団評価の各 IAT に関して、本試行の誤答率が 30 % 以上、あるいは、平均反応時間が 2000 ms 以上の参加者を分析から除外するという基準を用いたが、この基準に該当する参加者は 1 人もいなかったため、以下の分析では、全員のデータを分析対象に含めた。

3.2 IAT 分析手法

IAT の分析手法について、本研究では Greenwald et al. (1998) に準じ、各ブロックの最初の 2 試行は反応時間が長くなるために除外した上で、反応時間における外

れ値の影響を抑えるために、反応時間が 300 ms 以下の試行は 300 ms、3000 ms 以上の試行は 3000 ms と換算して分析に投入した。Greenwald らによると、このように反応時間の上限と下限を設定することで、各条件における外れ値の比率の違いによる効果を低減することが可能になると示唆されている。なお、本研究において、300 ms 以下、もしくは、3000 ms 以上の試行は、全体の試行の約 1% であり、これらの試行を除外しても、同様の結果が得られた。反応キーの正否に関しては、誤反応があった試行も分析対象に含め、正答のキーを押すまでの反応時間を分析に使用した。

さらに、参加者ごとに一致ブロックと不一致ブロックの平均反応時間を算出し、不一致ブロックの平均反応時間から一致ブロックの平均反応時間を差し引いたものを IAT 効果とした。自己評価 IAT において、IAT 効果の値が大きいほど、「自分」と「ポジティブ」の概念間の連合が「自分」と「ネガティブ」の概念間の連合よりも強く、潜在的な自己評価が肯定的であることを意味する。同様に、内集団評価 IAT において、IAT 効果の値が大きいほど、「同じグループ」と「ポジティブ」の概念間の連合が「同じグループ」と「ネガティブ」の概念間の連合よりも強く、潜在的な内集団評価が肯定的であることを意味する。各課題における IAT 効果の平均を Figure 1 に示す。

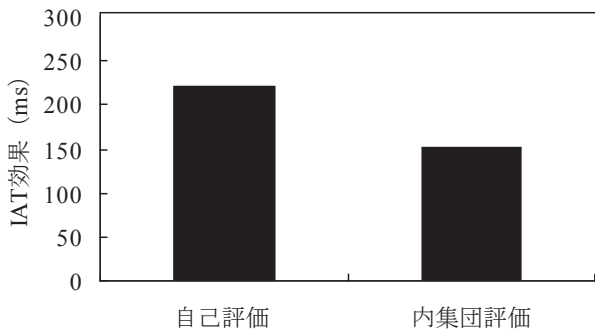


Figure 1 : 各課題における IAT 効果

3.3 自己評価 IAT

自己評価 IAT に関して、IAT 効果が 0 と有意に異なるかどうかを検証した。その結果、IAT 効果の平均値 ($M = 221.50$; $SD = 156.52$) は 0 よりも有意に大きく ($t(39) = 8.95$, $p < .01$)、潜在的な自己評価が肯定的であることが示された。さらに、自己評価の IAT 効果が条件間で異なるかどうかについて検討するため、IAT 効果に対して、性別 (男性 vs. 女性) と課題順序 (一致先行 vs. 不一致先行) を参加者間要因とした 2 要因の分散分析を行った。その結果、性別と課題順序の各主効果、性別 × 課題順序の交互作用はいずれも有意ではなく ($F_s \leq 2.80$, $n.s.$)、性別や課題順序の要因は自己評価の IAT 効果に影響しないことが示唆された。

3.4 内集団評価 IAT

次に、内集団評価 IAT に関して、IAT 効果が 0 と有意に

異なるかどうかを検証した。その結果、IAT 効果の平均値 ($M = 150.87$; $SD = 123.66$) は 0 よりも有意に大きく ($t(39) = 7.72$, $p < .01$)、潜在的な内集団評価が肯定的であることが示された。さらに、内集団評価の IAT 効果が条件間で異なるかどうかについて検討するため、IAT 効果に対して、性別 (男性 vs. 女性) と課題順序 (一致先行 vs. 不一致先行) と外集団数 (2 集団 vs. 3 集団) を参加者間要因とした 3 要因の分散分析を行った。その結果、性別と課題順序と外集団の各主効果・交互作用はいずれも有意ではなく ($F_s \leq 1.50$, $n.s.$)、性別や課題順序の要因は内集団評価の IAT 効果に影響しないことが示唆された。外集団数に関しても、2 集団条件 ($M = 128.25$; $SD = 86.19$) と 3 集団条件 ($M = 173.49$; $SD = 151.26$) で有意差がなく、外集団の数によって潜在的な内集団評価の程度は変化しないことが示された。

3.5 自己評価と内集団評価

潜在的な自己評価と内集団評価の関連性を検証するために、2 つの IAT 効果について、Pearson の相関係数を用いて無相関検定を行った。その結果、各課題の IAT 効果の間に、有意な相関は認められなかった ($r = .19$, $n.s.$)。

もともと、このように全体的評価については関連が認められなくても、性格特性次元ごとに両評価の関連が異なる可能性も存在する。したがって、探索的にではあるが、Big Five の各次元における関連性を検討するために、自己評価と内集団評価の IAT 効果について、Big Five の 5 次元別に無相関検定を行った。分析に先立ち、各条件の IAT 効果に関して、Kolmogorov-Smirnov の正規性検定を行ったところ、約半数の条件で分布に正規性が確認されなかったため、Spearman の相関係数を用いて検定を行った。その結果、外向性 ($r = .34$, $p < .05$) と開放性 ($r = .27$, $p < .10$) の各次元において、自己評価と内集団評価の IAT 効果の間に有意な正の相関関係が観測された。それに対して、情緒不安定性 ($r = .02$, $n.s.$)、誠実性 ($r = .03$, $n.s.$)、調和性 ($r = -.03$, $n.s.$) の次元では、2 つの IAT 効果の間に有意な相関関係は観測されなかった。

4. 考察

本研究では、IAT を用いて、潜在的な自己評価と内集団評価の対応関係の検証を行った。その結果、まず、参加者の潜在的な自己評価は高いことが明らかになった。先行研究 (Alicke et al., 1995; Koole et al., 2001) においても、自己は肯定的に認知されることが示唆されており、本研究の結果と先行研究の結果は一致していると解釈することができる。次に、内集団評価 IAT の結果から、内集団成員は外集団成員よりも、潜在的に高く評価されることが示された。本研究と同様に、最小条件集団パラダイムを用いて潜在的な内集団評価を測定した研究でも、内集団は外集団よりも潜在的に高く評価されることが報告されている (Ashburn-Nardo, Voils, & Monteith, 2001)。これらの潜在性に関する研究知見は、内外集団の評価差が、少なくとも意図的な統制ができないという観点において、

自動的に生じることを示している。したがって、人は内外集団に接すると、それらが新規のものであっても、内集団をより高く評価することが示唆される。このようにして、潜在的な内外集団の評価バイアスは、見知らぬ外集団成員に対しても、ステレオタイプや偏見などを生起させることに繋がるかもしれない。

さらに、本研究では、内集団への潜在的な高評価は自己評価が反映するために生じると仮定している。この点について、潜在的な自己評価と内集団評価の関連性を分析した結果、両者の全体的な相関は有意ではなく、正の弱い相関関係が観測された。ただし、**Big Five**の性格次元別に相関を検討した結果、外向性と開放性の次元において有意な正の相関関係がみられ、潜在的な自己評価が高いほど、内集団評価も高くなっていった。それに対して、情緒不安定性と誠実性、調和性の次元では、潜在的な自己評価と内集団評価との間に関連がみられなかった。

上記のように、潜在的な自己評価と内集団評価の相互関係は**Big Five**の性格次元別に異なっていたが、これはどのように解釈ができるであろうか。一つの解釈可能性として、各性格次元に対する重要性が、潜在的な自己評価と内集団評価の関係性に影響していた可能性が考えられる。つまり、外向性や開放性の次元は、自己評価にとって中心的な概念ではなく、これらの重要性が低い次元において、自己評価が内集団評価に反映されていたのではないかと推定される。安井(2008)によると、特に開放性の次元は、他の次元よりも日常言語における出現頻度が低く、人物の性格記述において有用性が低いことが示唆されている。このような知見を踏まえると、自己評価にとって重要性が低い次元では、自己を係留点として内集団の評価判断をするのに対して(Cadinu & Rothbart, 1996)、重要性が高い次元では、自己評価を内集団にそのまま当てはめるのではなく、自己と内集団との間で差異化をしようとしていたのではないかと考えられる。ただし、本研究では、各参加者に対して特性語や性格次元の重要性を測定していないため、これらの解釈の妥当性に関しては、今後の研究が必要である。

このように、重要性が低い次元において、潜在的な自己評価が、内集団成員に対する評価にも反映されると仮定すると、内集団ひいきや性格推定だけでなく、類似性や対人魅力にも影響を与えると考えられる。具体的には、対人魅力の領域では、人は似ている人を好む傾向があり、相手が自分と似ていると認知するほど、その人物に対する魅力が増加することが報告されている(e.g., Bryne & Nelson, 1965)。上記の点を踏まえると、潜在的な側面における自己と内集団の性格評価が関連性を持つことにより、意識上でも自分が内集団の人と似ていると認知しやすくなると考えられる。その結果、内集団成員に対する対人的な魅力が高まり、内外集団間の評価バイアスが促進される可能性が示唆される。

ところで、以上の議論は、自己評価が内集団評価に反映される過程が、重要性が低い次元において起こるヒューリスティック的なものであるという前提に成り立っている。

しかし、自己概念と内集団概念が相互に関連しているという知見を踏まえると(Otten & Epstude, 2006)、自己と内集団の概念連合の強化には、動機的要因も介在する可能性が考えられる。Knowles & Gardner (2008) や Correll & Park (2005) では、内集団との結びつきは自己に安心感や幸福感などの心理的恩恵をもたらすことが指摘されており、例えば、自己が脅威にさらされると、自己概念と内集団概念の連合は強くなることが予測される。今後の研究では、これらの動機プロセスと、本研究で示唆されたヒューリスティック的な認知プロセスの生起要因や条件分けについても検討する必要がある。

外集団数に関しては、2 集団条件と3 集団条件の間で、内集団評価の程度に変化はみられなかった。この結果から、外集団が1つのときに内集団評価が高くなるという Spielman (2000) に基づく予測は棄却された。それに対して、外集団数は内集団評価に影響を与えないという本研究の結果はセルフ・アンカリング説らの予測を支持しており(Cadinu & Rothbart, 1996)、外集団数に関わらず自己評価が内集団評価に反映されることで、潜在的な内集団評価は肯定的になったと推測される。ただし、本研究で示された潜在的な自己評価と内集団評価の相関関係は限定的なものであり、潜在的な内集団評価が肯定的であった結果の解釈として、自尊心維持・高揚のプロセス(Tajfel & Turner, 1979; Turner et al., 1987) が働いた可能性も指摘できよう。

最後に、本研究の限界として、以下の点が指摘できる。まず、本研究では評価に対する潜在的測定法としてIATを使用しており、内集団評価の望ましさは内外集団の相対的な評価差として測定している。先行研究では、最小集団状況における集団間の評価バイアスは内集団への好意的評価に基づいており(Brewer, 1979)、顕在的な自己評価は内外集団間の評価バイアスを予測することが示されているが(Otten & Wentura, 2001)、内外集団に対する評価を別々に測定して分析を行うことも有用となるであろう。また、本研究では最小条件集団パラダイムを使用しているが、このような仮想的な集団状況だけでなく、実際に存在する集団状況に対しても、本研究の知見が応用できるかどうかを検証する必要がある。特に、競争的な集団状況では、自己と内集団の関連性が強まるとともに、外集団への態度が否定的になり、自己と外集団の評価が対比される可能性も指摘できよう。さらに、実験で使用した性格特性語の種類についても、各性格次元において4語ずつと多くはないため、他の性格特性語の使用も含めて、さらなる検討を行うことが求められる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、新潟大学の福島治先生にご指導を頂きました。記して感謝の意を申し上げます。

引用文献

Alicke, M. D., Klotz, M. L., Breitenbecher, D. L., Yurak, T. J., & Vredenburg, D. S. (1995). Personal contact, individuation,

- and the better-than-average effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 804-825.
- Ashburn-Nardo, L., Voils, C. J., & Monteith, M. J. (2001). Implicit associations as the seeds of intergroup bias: How easily do they take root? *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 789-799.
- Bosson, J. K., Swann, W. B. J., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and the elephant revised? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 631-643.
- Brewer, M. B. (1979). In-group bias in the minimal intergroup situation: A cognitive-motivational analysis. *Psychological Bulletin*, 86, 307-324.
- Bryne, D., & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 659-663.
- Cadinu, M. R., & Rothbart, M. (1996). Self-anchoring and differentiation processes in the minimal group setting. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 661-677.
- Clement, R. W., & Krueger, J. (2002). Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, 39, 279-299.
- Collins, A. M., & Loftus, E. F. (1975). A spreading activation theory of semantic processing. *Psychological Review*, 82, 407-452.
- Correll, J., & Park, B. (2005). A model of the ingroup as a social resource. *Personality and Social Psychology Review*, 9, 341-359.
- Gramzow, R. H., Gaertner, L., & Sedikides, C. (2001). Memory for in-group and out-group information in a minimal group context: The self as an informational base. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 188-205.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Poehlman, T. A., Uhlmann, E., & Banaji, M. R. (2009). Understanding and using the Implicit Association Test: III. Meta-analysis of predictive validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 17-41.
- Knowles, M. L., & Gardner, W. L. (2008). Benefits of membership: The activation and amplification of group identities in response to social rejection. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 1200-1213.
- Koole, S. L., Dijksterhuis, A., & Van Knippenberg, A. (2001). What's in a name: Implicit self-esteem and the automatic self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 669-685.
- McCrae, R. R., & Costa, P. T. Jr. (1987). Validation of the five-factor model of personality across instruments and observers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 81-90.
- Otten, S., & Epstude, K. (2006). Overlapping mental representations of self, ingroup, and outgroup: Unraveling self-stereotyping and self-anchoring. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 957-969.
- Otten, S., & Wentura, D. (2001). Self-anchoring and ingroup favoritism: An individual-profiles analysis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 59, 525-532.
- Phelps, E. A., O'Connor, K. J., Cunningham, W. A., Funayama, E. S., Gatenby, J. C., Gore, J. C., & Banaji, M. R. (2000). Performance on indirect measures of race evaluation predicts amygdala activation. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 12, 729-738.
- Spielman, D. (2000). Young children, minimal groups, and dichotomous categorization. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 1433-1441.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In S. Worchel & W. G. Austin (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-47). Monterey, CA: Brooks-Cole.
- Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D., & Wetherell, M. S. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford & New York: Basil Blackwell.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成. *心理学研究*, 67, 61-67.
- 安井知己 (2008). 日常言語における Big-Five—性格記述の分類と、評価性・叙述性の検討. *パーソナリティ研究*, 16, 406-415.

(受稿：2011年2月25日 受理：2011年4月25日)